オーサカ
くいだおき

セーラームーンRPG③

オーサカくいだおれ

深森薫

大通りの両側に建ち並ぶ屋台に露店。
肉まんの蒸篭に群がる人々。
「わあ」
焼けたトウモロコシの、タレが炭火に焦げる豊かな香り。
「わぁお」
威勢のいい、フルーツの叩き売りの声。
「へえ」
揚げ立てのフライドチキンの香ばしい匂い。
「ひゃっほう♪」
もうもうと上がる焼鳥の煙。
そう。
ここはオーサカ、またの名を『くいだおれの街』。
街の周囲を巡る城壁に設けられた関所をくぐり、角をたった一つ曲がればそこはもうマーケットの賑わいである。そこかしこに屋台や露店が陣取り、所々に人だかり。
南のネクタリス海に面したこの町は、大陸を東西に横切る『銀の街道』のほぼ中間に位置し、また北からの主街道の終点にもあたる。いきおい人の往来も激しく、冒険者といい商人といい、旅をしている者なら必ず一度はここを訪れる筈だという。人が集まれば、その生活を――とりわけその胃袋を――支えるための人々がまた寄る。そうして、大陸の西から東から、北の山々から南の海から、あり

とあらゆる品物が、食材がここには集う。最高級のステーキ肉から薬膳に使う大ムカデの干物まで、おおよそ人が口にできるものでオーサカに無い物はないとさえ言われる。

大通りはやがて、大きく開けた空間へと続いていた。石畳の円形広場をぐるりと囲むように露天や屋台がぎっしりと軒を連ね、中央に配した泉の周りにもまた出店が立ち並ぶ。右を向いても左を見ても、目に飛び込むのは人・人・人、旅人の多いこともあってドワーフやエルフやグラスランナーの姿も珍しくない。商売人と客の丁々発止のやりとりが、楽しげに笑いあう人々の声が、ごろつき同士のいざこざが混じり合い、喧噪となって辺りの空間を満たす。

「っと！」

行き交う大人達の脚の間を縫って、後ろから駈けてきた少年たちの一人が、マーズの背中にぶつかった。彼女は視線を少年の方に向ける。目深に被った黒いフードの内側に垣間見えた瞳は闇色、髪の色と同じ。息が止まるほどの美形である。ぶつかってきた少年はさほど勢いがついていたわけでもなく、二、三歩たたらを踏んでマーズの方を振り返ると

「ごめんよ、お姉ちゃん！」

陽気にそう言ってまたすぐ駆け出し、仲間を追って人混みの中に紛れていった。マーズは別段気を悪くした風もなく、何事もなかったように再び歩き出した。

「おばちゃーん！　トリもも串十本、五本は塩で五本はタレね！」

大通りに踏み込んで二十歩も行かないうちに、ジュピターは焼鳥屋の屋台へふらふらと吸い寄せられた。金属製の軽鎧を身につけた、まだ若い長身の女戦士。アップにした明るい栗色の長髪が陽光に

映える。背中に負ったバスタード・ソードを揺らしながら、彼女は両手に持てるだけの串を持って仲間のもとへと戻った。

「ジュピターったら、もうすぐお昼ご飯なのに」

そう言いながら、マーキュリーの顔は笑っていた。淡いラベンダー・グレーの法衣に身を包んだ白皙(せき)の美女。ペンダントに刻まれた紋章は、知識の神ラーダの聖印である。短くまとめたブルーブラックの髪と静かな光を湛えた深蒼の瞳が、知的な印象を与える。

「ああ、もちろん昼も食べっけど……ん、旨いよ。どう？」

ジュピターは彼女に向かって串を差し出した。

「こっちがタレで、こっちが塩」

「ええ、っと、じゃあ、一口だけ」

そう言ってマーキュリーは差し出された手に自分の手を添え、塩焼きの串の一本にかじりついた。豪快なぶつ切りのトリももは丁寧な下ごしらえで生臭さもなく、肉汁たっぷりのジューシィな焼き上がり。

少々行儀が悪くても、そんなことは構わない。

旨いものは今すぐ食え。

何といっても、ここはオーサカ、くいだおれの街。

「……ほんと、美味しい」

「こっちのタレも旨いよ。ネギも」

「え、うん、じゃあ」
往来のど真ん中で二人の世界に入る連れを、マーズはまたかと呆れ顔で眺めた。
「マーズ」
と、ふいに後ろから呼ぶ声がする。面倒くさげに振り返った彼女の前に立っていたのは、ブロンドにブルー・アイの若い娘。
「なんだ、ヴィーナス、居たの」
「居たの、って？」
マーズの言わんとすることを解りかね、ヴィーナスは小首をかしげて問い返した。突き放したような口調はいつものことなので、とりあえず気にしない。
「さっき、いつの間にか居なくなってたじゃない。はぐれたのかと思って――」
「心配した？」ヴィーナスの瞳がきらりと輝く。
「せいせいしてたのに」冷ややかに言うマーズ。
「……まあ、それはおいといて。
それより、いいものあげるわ。はい♪」
言ってヴィーナスは小さな黒い革袋を差し出した。
口を絞る黒の革紐がついて、銀貨の入った革袋。
ぼごげっっ！
「あっ！　あんたねぇっ！　やるに事欠いて内輪の財布に手ぇつけるなんて！」

と、言うより先にヴィーナスの脳天にマーズの拳骨が炸裂する。
「……やぁぁぁん、あたしじゃないのにぃぃぃ……」
頭を押さえつつ、大きな目を潤ませて訴えるヴィーナス。
「ったく、だから盗賊と一緒の旅はごめんだっていったの！」
「だから、あたしじゃないってばぁぁ」
「だったら何であんたがあたしの財布持ってんのよ！」
「さっきの坊やの仕業よぉ。ほら、さっき男の子がぶつかってきたでしょ。マーズったら全然気付かないんだもん」
ヴィーナスにそう言われて、マーズは初めてあっ、という顔をした。
もっとも、元々ポーカーフェイスなだけに大して表情は変わらないのだが。
「そ、そう、そりゃ、迂闊だった――わ」
「だからあたしが取り返してきたのに。マーズったら、ひどぉぃ」
ぷっとふくれて拗ねてみせるヴィーナス。
「それは、その……悪かったわ、ね」
と、唸るように、マーズ。
そのマーズを、ジト目で見やるヴィーナス。
「だから、悪かった、ってば」
「……ほんとに、そう思ってる？」

「思ってるわよ」
「じゃあ――」
ヴィーナスはそう言ってにぱっ、と笑った。
「お詫びのしるしに、キスさせて♪」
ごぐっっ！
再びマーズの鉄拳が炸裂。
「……あんまし……つけあがってんぢゃ、ないわよ」
ヴィーナス、撃沈。
「さ、バカは放っといて、みんな、行こ行こ」
言ってマーズは、仲間二人を促して歩き始めた。

*

一行は最も賑やかな広場と大通りを一本はずれた路地へと入って来た。裏通りの筈なのに、表通りとほとんど変わらない賑わいぶりだ。
「うわあ……レストランばっかし」
「そりゃそうよ、ここが天下の『ネクタリス通り』だもの」
思わずヴィーナスの漏らした言葉に、すかさずマーズが突っ込んだ。

ネクタリス通り――南に望むネクタリス海の新鮮な海の幸を売り物にするレストランが、街の端から端まで二軒とあけず門を連ねている、くいだおれの街オーサカの超目玉である。
「『フライの達人亭』ね……あ、いい匂い」
はしゃぐヴィーナス。
「んー、ほんとだ。おいしそう」
と、ジュピター。
「『エビのラインダンス亭』だって。あー、いいわぁ、ロブスター食べたい」
「いやぁ、やっぱオーサカに来たらカニだろ」
「むー……そうよね、やっぱ月夜ガニの生け造りと浜茹で闇夜ガニははずせないわよねー」
放っておけばそのままふらふらとその辺りの店の中に入っていってしまいそうな二人を、
「ほら二人とも、寄り道してんじゃないの」
マーズがぴしゃりとたしなめた。
「大体ジュピター、あんたがおすすめの店があるっつったんでしょ、しっかり道案内してよね」
「ん？　あ、うん、悪い悪い」
ジュピターはふと我に返ってきまり悪そうに頬を掻くと、先に立って再び歩き出した。
「ねえ、そこってどんな店？　美味しいの？」
嬉々としてヴィーナスが訊ねる。
「うん、いい所だよ。おばちゃんが一人で切り盛りしてる、ほんと小さな店だけど」

「へえ、何だか通の店っぽくていいじゃない」
マーズもいつになく御機嫌である。
「毎朝おばちゃんが自分で港へ行って、とれたてを仕入れて来るんだ。だから、メニューはその日の水揚げ次第でね……ほら、そこの四辻を渡ったとこだよ」

『マーメイドの舌鼓亭』は、カウンター席の他にはテーブル三つだけの小さな店である。オジさんの四人連れがそのうちの一つに陣取ってエールを一杯ひっかけているより他に客はない。カウンターの内側は厨房になっていて、体格のいい女性が一人せっせと立ち働いている。
「ステラさん！」
ジュピターが声をかけると、彼女は仕事の手を止めて顔を上げた。引っ詰めの黒髪に混じる白いものから、女盛りを少し過ぎた年頃と分かる。彫りの深いはっきりとした顔立ちに、歳相応の強さと暖かさが滲む。
「……おや、まあ！」
ステラと呼ばれた女将は、声の主の姿を認めると、明るい驚きをぱっとその表情に浮かべ、
「誰かと思ったら。まあ、まあ、ほんとに久しぶりだねぇ。元気だったかい？」
手を取りあって再会を喜んだ。
「まあね。何とか、ちゃんとやってるよ」
「腹ぺこで行き倒れたりしてないかい？」

「やだなぁ、もうそんなこと無いって」
照れくさそうに笑うジュピター。
「約束通り、真っ先に寄らせてもらったよ。ほら、仲間も連れて。ステラさんの料理、みんなにも食べさせたくってね」
「ああ……料理、ねぇ」
ステラの笑顔が不意に翳った。
「それが……ね。
ああ、まったく、どうしてこうツいてないんだろうね。せっかく懐かしいお客さんが来てくれたってのに、もてなすこともできないんだよ。……おや、あんたたち、知らないのかい？」
何のことやら、という顔できょとんとしている皆の様子に、
「ネクタリスの海が死んじまったんだよ」
彼女はそうつけ加えた。
女将の話によると、五日前の早朝一番で漁に出た船が、魚の死骸が大量に浮かんでいるのを発見したのだそうだ。原因は不明。死骸の数は半端ではなく、網を打てば引っかかるのはイカやエビカニの、これも死骸ばかりで、ネクタリス中の魚介類がほぼ壊滅状態だったという。それから五日経った今も水揚げは普段の十分の一ほどまでしか回復しておらず、海産物の値段は急騰、この店のような小さな食堂まではとても回ってこない。いつまた同じようなことが起こるとも知れず、関係者は不安を募らせているという。

「……そういうわけでね、エビもカニもないけれど、トリ料理ならいくらでも作ってあげられるよ。オーサカまで来てトリなんて、がっかりかもしれないけど、せめてご馳走させておくれ」
ステラはそう言って気丈に笑って見せた。

「あーあぁ、せーっかく楽しみにしてたのに。浜ゆで闇夜ガニのトロトロのお味噌」
フライドチキンの骨を手でくるくると弄びながらヴィーナスがぼやいた。
「事情が事情だもの、仕方ないでしょう」
チキンステーキにナイフを入れながらマーズが言う。
「ほらジュピター、あんたも機嫌なおしなさいよ」
「……ここの売り物は、おばちゃんこだわりの安くて旨いシーフード料理なんだ」
付け合わせの粉ふきイモをフォークの先でつつくジュピターの声には、どこか張りがない。
「こんなことがいつまでも続いたら……どうなるんだろう、この店」
特大の溜息を一つ。
「……気になるなら、調べてみる？」
見かねたマーキュリーが、チキン南蛮を切り分ける手を止めて声をかけた。
「魚介類の大量死の原因が判れば、再発することも、その不安も無くなるわ。私達で解決できるものなら、やってみましょう」
「……付き合ってくれる？」

「もちろん。私は、ね」
言ってマーキュリーは、視線をマーズに送った。
「……あたしは別にいいわよ。このままエビもカニも食べらんないのは癪だし。けど――ただ働き、っていうのは遠慮したいわ」
「それなら大丈夫。この件で頭を抱えている人は沢山いるんだから、それなりの報酬を出してくれる所が必ずあるはずよ」
マーキュリーはにっこりと微笑んだ。
知らない者が見れば、神に仕える者の慈愛に満ちた微笑みかと思うように。
「OK、そういうことなら」
「あたしもいいよ。マーズがいい、って言うなら。あたしもカニ食べたいし」
三本目のチキンをたいらげて、ヴィーナスも軽くそう答えた。
「じゃあ、決まりね。食事がすんだら、何カ所か当たってみましょう」

*

どこかから依頼を取り付ける、という話は存外簡単についた。
ステラの店を出て三十分。観光協会と漁協が魚介類の大量死事件の調査をしてくれる冒険者を捜している、という情報がすぐに一行の耳に入った。旅の人間の集まる街のこと、冒険者も当然沢山いる

のだが、何しろ食と遊びの行楽地、ここまできて仕事をしようという者は少ないらしい。
かくして。漁協の全面協力のもと、一行は翌日早速現場海域の調査に乗り出すこととなった。

「さて、このあたりだよ、一番ひどかったのは」
櫓を漕ぐ手を止め、熊のような髭面のオヤジが言った。
「フォボス、ディモス、お前達は上から見ておいで」
マーズは連れていた二羽の鴉を空に放った。『使い魔（ファミリアー）』と呼ばれる彼等は、魔法使いとその精神や五感を共有し、その目となり耳となり働く。鴉の黒い翼は主人たるマーズの頭上をくるくると旋回した後、空の蒼に溶けて見えなくなった。
「さて。じゃ、ヴィーナス」
使い魔たちを見送ったマーズは、連れの盗賊の方をくるりと向き直った。
「なぁに？」
「これ、腰に巻いて。しっかり結んで頂戴」
「？？」
差し出されたのは、ただのロープである。よく解らないまま、ヴィーナスはマーズの言うことに素直に従った。当のマーズは何やらぶつぶつと呟いている。
「何かあったら、そのロープを引っ張ってくれりゃいいから」
と言うジュピターは、ひと抱えもある大きな岩を手に立っている。

「……じゃ、しっかり調べてらっしゃい」
マーズの合図で、ジュピターが岩を海に放り出した。
三つも数えないうちに、
「ひゃっ！」
結んだロープがヴィーナスの細いウエストに食い込み、体ごと海の中へと引きずり込む。
どぱーんっ！
水しぶきを上げて船から転げ落ちたヴィーナスは、持ち前の機転と素早い動きで何とか沈むより先に船縁にしがみついた。
「っ、ちょっと！　何てことすんのよ！　あたしを殺す気！」
「大丈夫よ、あんたには『水中呼吸』と『水圧軽減』の術がかけてあるんだから。海の底でも息できるし、自由に動き回れるわよ」
マーズは至極冷静な口調で答えた。
「危なくなったらあたしが引き揚げてやっからさ」
「あ……私は、治癒の魔法も解毒の魔法も使えるし」
「だからって何であたしなのよ！」
「調べものと捜し物は盗賊の領分でしょう。ここで一番頼りになるのはあんたなんだから。しっかり手がかり探してきなさい」
『頼りになる』

マーズのその一言が殺し文句だったようである。
「……んー、仕方ないわね、マーズにそこまで言われちゃ。ま、どーんとあたしに任せてちょ」
ヴィーナスは急に機嫌をなおし、ウインクを一つ飛ばすと早速水の中へと潜っていった。

オーサカの民に豊かな恵みを与えるネクタリスの海は、大小無数の島々に囲まれた内海である。蒼い水面は波穏やか、島影は鮮やかな緑。魚の大量死などという不気味な事件の舞台だとは思えないのどかさだった。
と。
ヴィーナスを繋いだロープが、突然強く引っ張られた。
引き上げの合図である。
二度三度、また二度三度、ヒステリックに合図は繰り返された。緊急のようである。ジュピターが全速力でロープを手繰り寄せる。まだ揚がらない。ヴィーナスはかなり遠くまで調べ回っていたようだ。
ざばっ！
「ひぃぃぃぃぃやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっつ！」
やっと水中から姿を現したヴィーナスは、大慌てで船の中に転がり込んだ。
「にっ、逃っ、逃げ逃げ逃げっ逃げっ逃げ逃げ！」
ヴィーナスのわめきが意味をなす前に、

ざばしゃぁぁぁんんっっっつ！
激しい水音とともに海面が盛り上がった。
現れたのは、巨大な――芋虫。
「うぎょへぇぇ！　なんだぁあれ！」
「あっ、ありゃぁシー・ウォームだ！」船主のオヤジの声が上擦る。
「海棲の巨大な長虫よ！」と、マーキュリー。
「んなこと見りゃ判るわよ！」ツッコミはマーズ。
太さは、人が三人手をつないでようやく抱え切れようかというほど。幾つもの節が連なった長い胴体の先端には口とおぼしきものがあり、その周囲には無数の触手が蠢いている。
ふしゅるるるるうぅぅぅぅぅぅ
シー・ウォームは大きく息を吹き出すと、狂ったようにのたうちながらパーティーの方に向かって動き出した。
「やぁぁん、こっちに来るぅっ！」
「『光の矢（エナジー・ボルト）』！」
気合いの入ったマーズの呪文一喝、青い空に三本の光が緩やかな弧を描く。魔法の光はウォームの体の上でぱっと弾けた。
ひゅごぉぉぉぉぉぅぅぅぅぅぅ
その巨体が大きくのけぞるが、ウォームはそもそも最初から狂ったように暴れていたので、今のが

効いているのかどうかは今一つ定かでない。船は激しく揺れている。ひっくり返らないのは、熊髭の漁師の、熟練の技のお陰である。しかし、このままではじきに全員船ごとシー・ウォームの餌だ。

マーズは再び呪文を唱えた。先刻のそれとは韻律の違う言語のようである。

唱え終わると、

どんっっつ！

「わっ！」

いきなりジュピターを船の上から突き落とした。

「くぉらマーズ！　いきなり何すんだ……わわっ！」

バランスを崩して二、三歩たたらを踏んで振り返ったジュピター。

彼女が立っているのは、海水の上である。

「『水上歩行』の術よ。それで戦えるでしょ！」

「えっ、ちょっ、待てよ。なっ、何で落ちないんだ？」

ジュピターは訳の解らないまま、足下を確かめるようにブーツのかかとで波頭を叩いている。

「だから！　『水上歩行』――」

「水の上を地面の上みたいに自由に歩ける魔法がかかってるのよ」

割って入ったのは、マーキュリーの声。

「あ、なんだ、それならそうと言ってくれ。よっしゃあ！」

「……だから最初っから言ってたじゃない……」

マーズのツッコミを聞く間もなくジュピターは駆け出した。トレードマークのバスタード・ソードを手に、巨大ウォーム目指してまっしぐらに走る。

跳んだ。ジャンプが高い。

上段から気合いとともに刀身を叩きつける。

手応えが悪い。今一つ効いていない。

シー・ウォームの体表はゴム状の皮膜で覆われているのだ。

芋虫は自分を殴った相手に怒りの矛先を向けた。触手が鞭のように伸びる。

横飛びでそれをかわすジュピター。

「……これならどうだ！」

ジュピターはウォームの背後――実際の所、どちらが背中なのかは定かではないが――にまわると、切っ先を前に突進した。

ふぎゅうぅぅぅぅぅっっっっつ！

長剣の刀身が体節の隙間に深々と突き刺さる。これは効いたようだ。ジュピターはうねるウォームの体を蹴たぐって得物を引き抜くと、素早く退いた。そうしなければ、すぐに触手が捕らえにかかってくる。ウォームは苦悶しながら水中に潜った。

まだ、終わってはいない。

ジュピターは再び剣を構えた。切っ先を下に向け、敵が現れるのを待つ。

数秒の、沈黙。

膨れ上がる殺気。
ジュピターの足下が盛り上がり、
ざざごぉぉぉぉんんっっっつ！
飛び散る水しぶきの中を、下から突き上げるようにシー・ウォームの巨体が現れた。
同時に、構えた剣の刀身がウォームの頭に深々と突き刺さる。一層激しく暴れるウォーム。剣を引き抜いた跡から青い体液が吹き出した。急所を突かれたウォームは暫くのたうちもがいていたが、そのうち水の中に潜り、以後浮かんでは来なかった。
「うわぁ……気持ち悪……」
運悪く芋虫の『返り血』を浴びてしまったジュピターは、顔をしかめながら揺れる水面の上をすたすたと歩いて皆のもとへと戻った。
「ごくろうさま。怪我は？」
船上で待っていた神官は、そう問いながら懐からスカーフを取って差し出した。
「わっ、ばっちぃ」
「……その恰好で、あんまりこっち寄らないでくれる？」
「お前ら……人に戦わしといてそりゃないだろが……」
盗賊と魔法使いは、つれなかった。
「……おかしい！」
ずっとセリフも無く黙々と船を操っていた熊髭の漁師が、久々に声を上げた。

「こんな所にシー・ウォームが出てくるなんざぁ、やっぱりこの海ぁ変だ！あいつぁ普通、真っ暗な深ぁい海や洞窟ん中で暮らしてる奴だ。こんな所に、しかもンなお天道さんのギンギン照ってる真っ昼間に出て来るわけがねぇ！」
「ヴィーナス、あんた、何かウォームを怒らせるようなことした？」
マーズが冷ややかに問う。
「まさか。あんなグロいの、近づくのも嫌ぁよ。あたしが遭った時はもう、めっちゃくちゃに暴れながらそのへん泳いでたわ」
髪に含んだ水を絞りながら、ヴィーナスは肩をすくめた。
「そう。……で、何か手がかりは見つかったの？」
「ぜーんぜん。底まで潜ってみたけど、貝とかエビカニとかの死体が転がってるくらい」
「おいおい、しっかりやってくれよな」
と言うジュピターは、巨大芋虫の血が付いた剣をせっせと手入れしている。
「あによぅ、ほんとに何もなかったの。いっくらあたしが天才だからって、無いものは見つけらんないわよ」
「……すみませんが、ご主人、」
それまで黙って皆のやりとりを聞きながら考え込んでいたマーキュリーが、ふと何やら思いついたように言った。
「この辺りで、シー・ウォームが棲んでいそうなところはどこですか？」

*

一行は、近隣の島々のうちの一つに船を寄せた。島の周囲はごつごつとした岩の突き出た浅い岩礁が取り巻き、黒褐色の岸壁には打ち寄せる波が穿ったと思われる大小様々な洞穴が口をあけている。パーティーは岩場の間に小さな砂浜を見つけ、そこから陸に上がることにした。

「で、俺ぁここで待ってりゃいいんだな？」

「ええ。もし、何かあった時には――」

そう言ってマーズは空を見上げた。

二羽の鴉がどこからともなく姿をあらわし、鋭く一鳴きして彼女のもとへと舞い降りた。

「この子たちに話しかけてくれれば、私達に伝わるから。で、私達に何かあったときはこの子たちが騒いで知らせるから、逃げるなり、応援を呼ぶなりして」

「はあ。『この子たち』、ねえ」

髭面の漁師は、船縁に留まった鴉と黒髪の魔術師の顔とを不思議そうに交互に見やる。

目が合うと、鴉は首をかしげて甲高くカァと鳴いた。

「んー……まあ、姐ちゃんたち、くれぐれも気ィつけてな」

彼はそう言ってパーティーを送り出すと、キセルに火をつけごろりと横になった。

冒険者の一行は、パーティーの知恵袋、知識の神に仕える神官・マーキュリーの提案で一際大きな

洞窟に探りを入れることにした。丁度引き潮の折りで、入口までは膝丈ほどの浅瀬を伝って割合簡単にたどり着くことができた。

ヴィーナスが、魔法の灯をともしたショートソードを手に先頭を、少し間を置いてマーズが、カンテラを手にマーキュリーが、最後尾をジュピターが固めて進んでゆく。洞窟は天然の岩窟で、天井が高く幅も広い。所々が大小の潮だまりに遮られていたが、奥に向かって緩やかな登り傾斜を作っているためそれも次第に無くなっていった。波の音が反響し、まるで岩窟の奥から海鳴りが聞こえてくるようだ。

そうして、二、三分も歩いた頃だろうか。

ふと、ヴィーナスが立ち止まった。

彼女はしゃがみ込んで足下から何やら拾い上げた。

「……なんだ、ただの花ね」

そう言ってつまみ上げたものを放り出そうとするヴィーナスを、

「待って」

マーキュリーが制した。彼女はヴィーナスからそれを受け取り、注意深く見回した。幾つにも枝分かれした茎の先に小さな星形の白い花が幾つもついた、ごく普通の草花のようである。

その何の変哲もない花に、彼女は眉をひそめた。

「その花が、どうかした？」マーズが訊く。

「ブリトリカの花よ、これ」

「んげっ」
その名に最初に反応したのはヴィーナスだった。
「何の花って？　……なんだ、こんな感じの花なら、この島にいっぱい咲いてたわよ」
問題の白い花をしげしげと見ながらマーズが言う。使い魔達の見たヴィジョンは、そのまま彼女の感覚として入ってくるのだ。
「花畑みたいにね」
「……ブリトリカの根には、毒があるの」
マーキュリーの声が低く、どこか気のない調子になった。
何か考え込んでいるときの、彼女の癖である。
「精製すれば、猛毒が採れるわ。アイオケーンっていって――」
「飲めばイチコロの効き目、透明で無味無臭。最高級の暗殺用の毒薬で、その筋に持っていけば言い値だっていくらでも買い手がつくわよ」
「やけに詳しいわね」ヴィーナスの解説に、マーズがぼそりと突っ込んだ。
「ま、ね。蛇の道は蛇、ってやつぅ？」
ヴィーナスは悪びれた様子もなく謎な笑みで答える。
「それで、マーズの言うとおり、この島がブリトリカの群生地だとしたら」
「ボロ儲けのちゃーんす♪」
……

「……って、やあね、冗談よ、じょ・お・だ・ん」
ヴィーナスが冷たい沈黙を慌てて混ぜ返す。
「いえ、まんざら冗談でもないわ」
淡々と、マーキュリーが言った。
「アイオケーンは金になる。
――う思った人間は、なにも私達が最初じゃない筈ね」
四人は一斉に洞窟の奥を見つめた。魔法の光とカンテラの灯が黒褐色の湿った岩肌を照らしている。光の届かない、その先は濃密な闇。海をはるかに離れても、波のざわめきは遠く、低く聞こえてくる。
「とにかく、行ってみよう」
パーティーは再び歩を進めた。

「……っ、と、ちょい待ち」
再び、ヴィーナスが立ち止まる。
彼女は右腕を伸ばして後ろの仲間を制すると、しゃがみ込んで辺りを調べ始めた。
「トラップだわ、糸が張ってある」
極細の糸がすねの高さに張られているのが、光の加減で辛うじて見えた。罠の存在は、間違いなくここでよからぬことが行われているという証拠である。
全員の表情に緊張が走った。

「おそらく鳴子かなんかだろうけど。引っかけたり踏んだりしないように、気をつけてね」
ヴィーナスはそう言って、ひょいと糸をまたいだ。
マーズもあとに続く。
マーキュリーも――
がらんがらんがらんがらんがらんがらんがらんが
と、突然岩窟の奥で、遠くバケツをかき鳴らすような音が。
「…………」
「…………」
「…………」
「…………ごめんなさい…………」
パーティー一の知恵袋は、小さくなってそう言った。
マーズは頭を抱えて唸っている。
「…………さて、どうする？」
気を取り直して、ヴィーナスが言う。
「…………ま、仕方ないさ、鳴らしちゃったもんは」
ジュピターは軽い口調で言いながら、無造作にトラップを踏みつけた。
がらんがらんがらんがらんがらんが
「面白い、お出迎え戴こうじゃないか」

すらりと剣を抜き、ヴィーナスとともに先頭を歩き始めた。
闇が薄くなる。
通路の右手から明かりが漏れている。奥は少し広くなっているようだ。
「あぁあ……まるで素人ね。殺気が丸出しだわ」
ヴィーナスは肩をすくめて失笑する。
ジュピターは羽織っていたマントを外し、剣の先に引っかけた。
それを、明かりの漏れ来る先に突き出す。
　ぼすっ！
待ち伏せの斬撃が、入口の脇から鈍い音を立てマントを叩いた。
あまりの手応えのなさに、隙が生まれる。
そこにすかさずヴィーナスが飛び込んだ。
ショート・ソードをはたき落とし、腹を蹴り上げる。
体をくの字に曲げた男の、後頭部に肘打ちを叩き込む。
それで終わりではない。部屋――といっても人工のものではなく、天然の洞窟の中にできた広い空間なのだが――中ではヤクザ風の男が数人待ちかまえていた。
ジュピターが出た。大剣を振るう。
ヤクザはそれを受け止める。得物は普通の長剣。
ジュピターが速い。

ヤクザはついて来れない。三度打ち合って、まず一人が倒された。
後ろからまた一人。
振り向きざまに横に薙ぐ。当たらなかったが敵は一瞬ひるんだ。
次の一瞬には上段の斬撃が入って、また一人が倒れた。
ヴィーナスもじっとなどしていない。突っ込んでくる相手をかわしながら、腕を取ってぐいと引いた。バランスを崩してつんのめる相手を、後ろから岩壁に叩きつける。これで一人。二人目は足を払い、倒れたところを踵で踏みしだく。
乱闘の結果、ヤクザが六人、すべて地べたに転がった。
「シケたお迎えだね」
息一つ乱さずに、言ってジュピターは剣を収めた。
「こいつら、いったい何者？」
目を剥いたままのびているヤクザの顔を苦々しく見ながら、マーズが言う。
「ヤクザさんが団体で、仲良く無人島でピクニック」
と、マーキュリー。
「……ンなわけないでしょ」
「――冗談はさておき。やっぱり、あの花が鍵みたいね」
真顔に戻って、マーキュリーは部屋の奥を見渡した。鉄の管とオークの樽とを幾つも組み合わせたような大きな器械が一際目を引く。その傍らには石臼と杵、大きな鍋釜、そして白い球根を山と積ん

だ篭が幾つも置かれている。
「ブリトリカの根よ。ここでアイオケーンを作ってるんだわ。精製する過程で、毒を含んだ汚水を垂れ流しにしてたんでしょう。それで、シー・ウォームがたまらず海に出ていったのね」
「じゃあ、魚の大量死も？」マーズが訊く。
「それは、まだ何ともいえないわ。汚水を流した位でそこまでの被害が出るとは思えないし」
「……ボスがいるね。どう見てもただのチンピラだもんな、こいつら」
ジュピターは同意を求めてマーキュリーの方を見た。
返事はイエス。
「そうそう。こんな大それたことやってるんだもの。黒幕は大物よ、きっと」
ヴィーナスが軽く言う。
「お宝だって持ってるかもよ。どーせ相手は悪人だし、あたし達が頂戴しても問題なーし！」
……
「……って、やあね、冗談よ、じょ・お・だ・ん。ほぉら、さっさと次行きましょ、次」
ヴィーナスはまた冷たい沈黙を慌てて混ぜ返すと、先頭に立って部屋を出た。

「――声がするわ」
再び細くなった天然岩の回廊の途中で、先を歩いていたヴィーナスが立ち止まり、あとに続く三人を右手で制した。奥はやはり部屋のようになっているらしい。明かりが漏れている。聞こえてくるの

は人の声のようだが、何を喋っているのかははっきりしない。
パーティーは声の聞き取れるところまで、相手に気付かれないよう息を殺して近付いた。
声の主は、少なくとも二人。
「……よかろう」
一人は、太い、低い声。いい声だ。役者にでもなれそうな。
「確かに受け取った」
「……本当に、これだけの値打ちがあるんだろうな」
もう一つの声が訊いた。これも低い声だが、少し掠れていて、いかんせん品がない。
「ハッタリだったら、ただじゃおかねぇからな」
「ふん。ハッタリでネクタリス中の魚が殺せるか？　効き目は証明済みだ」
「……ビンゴ、ね」ヴィーナスが呟く。
「どうする？　突っ込む？」
「相手はほんとに二人？」
頷くかわりにマーズが訊く。ヴィーナスが前に出た。様子をうかがい、手で合図を送る。
『四人』
互いに顔を見合わせた。
『いける』
パーティーはそう判断した。

ジュピターとヴィーナスが先陣でなだれ込む。
「うわぁ、なっ、何だ！」
こちらを向いて椅子に腰掛けていた男。品の無い方の声の主だ。でっぷり太った脂っぽい顔。
他にごつい男が三人、どれも人相はすこぶる悪い。彼等はすかさず得物を抜いた。
また乱闘になった。

「『日の精霊（サラマンダー）』！」
マーズの呪文が完成し、岩壁に下げられた松明の火から真っ赤な炎の舌が伸び、武装した男たちの一人を舐めた。初めて受ける魔法の攻撃に恐慌した男は、ジュピターにあっさりと殴り倒された。
ぎんっ！
別の一人が、戦斧でジュピターに斬りかかる。太った男の向かいに座っていた奴だ。
「っ、てめえら、どっから入って来やがった！」
渋い方の声の主。黒髪に、太くて長い眉。声だけではない、顔も役者になれそうな整ったものである。
……もう少し人相がよければ。
「やかましい！　このくそド悪党が！」
再び刃を交えた。岩窟の薄暗さの中、火花が散るのが見える。
「ネタは挙がってんだ、海に毒なんか撒きやがって！」

「むうっ、どうしてそれを！」
「お前が言ってんじゃねーか、その口で！」
ジュピターは矢継ぎ早に剣を振るうが、男はひるむことなくそれを斧で受け流し、反撃の隙をうかがっている。落ち着いた様子にこなれた動き。かなりの場数を踏んでいるようだ。ジュピターの攻撃はなかなか当たらない。そのうち、
剣が滑った。ジュピターに隙ができる。
斧の一撃が左腕に入った。金属鎧のおかげで大した怪我はないが、打撃のショックまでは食い止められない。左手は痺れて使えなくなった。
形勢が逆転する。敵は絶え間なく斧を打ち込み、ジュピターがそれを剣で受け流す。じりじりと後退し、壁際まで追いつめられた。
敵はチャンスとばかりに戦斧を大きく振り上げる。
大振りは、得てして隙ができやすい。
ジュピターは見逃さなかった。身を低く沈め、相手の懐に入る。
同時に左下から右上に向かって刃を返す。
呻きとともに、男の体が前にくずおれた。
さらに。
「んにゃろっ！」
後頭部を、剣の柄で思い切りどつく。

どさっ

二人目が、地面に転がった。

乱闘のどさくさに紛れ、太った男が駆け出した。テーブルの上に置かれた銀貨の袋をひったくり、洞窟の外に向かって一目散に。その顔と体型からは想像もできない、素晴らしいフットワークである。

「『大地の精霊よ、戒めの手を』！」

マーズが再び『力ある言葉』を放った。それに応えて地面が盛り上がり、男の足をがっちりと捕らえる。いくら男があがいても、地の精霊はその手を離さない。

「……ふん」

精霊使いは、もがく男を怒りと軽蔑の眼差しで見つめた。

ヴィーナスの相手はスキンヘッドの大男。海坊主というのがいるとしたら、こういう感じだろう。腕を振り上げ、ヴィーナスを捕らえにかかる。彼女は右に軽くかわし、後ろへ抜けざま足払いをかけた。

「痛っ！」

声を上げたのはヴィーナスの方である。眉間に深い縦皺を寄せて海坊主はにいっ、と笑った。

眉のない笑顔がとても不気味。

海坊主が再び振るう拳をかわしながら、ヴィーナスは体勢を立て直した。

「……今ので素直に倒れてれば――」

独り言のように言って、ヴィーナスは匕首を手にした。刀身の細い、針のようなダガー。

「――も少し長生きできたのに、ね」
ヴィーナスが動いた。男の左側をすり抜けるつもりだ。
「ぬぉっ！」
男の手が空を切る。今のはフェイントだった。ヴィーナスは男の逆をついて後ろに回り、次の瞬間。
海坊主の体がびくんと波打ち、やがてばったりと倒れ動かなくなった。

*

四人は、無人島の原野に立っていた。眼前にはあの小さな花が無数に咲き乱れ、どこまでも続く白い絨緞が風に波打つ様が広がっている。
「で、本当にやっちゃっていいのね？」
マーズが念を押す。
マーキュリーが静かに頷くのを見て、彼女は右手を真横に持ちあげ呪文を唱え始めた。
精霊語である。
「『サラマンダー……おいで』」
ジュピターが手にした松明から炎が伸びる。炎はマーズの正面の地表近くで渦を巻き、徐々に形をあらわした。

人間の子どもほどの大きさの、大蜥蜴（とかげ）である。トカゲといっても、実体があるわけではない。火の精霊サラマンダーが現世（うつしよ）に顕現する際の、仮初めの姿に過ぎない。

「『さあ、サラマンダー、遊んでらっしゃい』」

マーズが精霊語で語りかけると、全身に炎を纏った大蜥蜴は辺りをむやみやたらに駆け回りはじめた。蜥蜴の走った跡で次々に火の手が上がる。あっという間に、白い花の絨緞は紅い炎のうねりに変わった。青臭い白煙をもうもうと立て、ブリトリカの可憐な花が焼け落ちてゆく。

「何か、もったいないね、綺麗だったのに」ジュピターがぼそりと言った。

「仕方ないっしょ。ほら、よく言うじゃない、綺麗な花には毒がある、って」

と、ヴィーナス。

「……刺だってば」

マーズが突っ込む。呆れると、声のトーンが低くなるらしい。

「『綺麗な刺には毒がある』？」

「……いえ……いーけどね、別に……」

「仕方ないわ。このままにしておけば、また同じようなことが起こるのは目に見えてるもの」

マーキュリーが言った。

「でも――自然はまた甦るわ。みんながこの事件のことをすっかり忘れた頃には、此処も元のように白い花で一杯になってると思う」

「さて、これで片が付いたわね」

やがて全てを灰にし終えてサラマンダーを精霊界に帰すと、マーズは仲間の方を振り返った。
「帰りましょう」
「そうね。宿に帰って着替えたら、みんなで出掛けましょ」
マーキュリーが応える。
「報酬は銀貨で二〇〇〇フロル、さらに漁協から各レストラン共通のディナー食べ放題&飲み放題お食事券八枚と観光協会からお一人様三〇〇枚分のカジノ用チップ引換券四枚」
敬虔なラーダ神官はそう言って極上の笑みを浮かべた。
「楽しい夜になりそうね」
陽は大分西に傾いてきた。
くいだおれの街オーサカが、夜の顔を見せはじめる頃である。

――オーサカくいだおれ・終

セーラームーンRPG③　　オーサカくいだおれ
著　深森薫
表紙　飛鳥圭

1999年 4月　　初版発行
2023年 4月　　PDF化にあたり加筆修正

発行者　　Bitter & Sweet （深森薫）
http://mimorikaworu.yomibitoshirazu.com/